The Futaka Spirit

実践日 2015/06/22

(現教だより第7号)

５年　外国語科
単元名「お互いのことを伝え合おう」

指導者　齊藤　あかね　先生

留学生との外国語でのコミュニケーションを通して子どもたちは，相手のことを知ったり自分の事を伝えたりする喜びを感じていました。100%は理解できなくても，何とか伝え合おうとする子どもの姿が魅力的でした。

【学習活動】

1　本時の課題を確認する。

2　留学生とすごろくゲームをする。

Ｔ１とＴ２によるデモンストレーション

すごろくゲームでお互いのことを伝え合う

3　全体交流により，友達の伝え方のよさを知る。

4　２回目のすごろくゲームをする。

留学生の話から伝え方のよさを知る

相手を換えて２回目のすごろくゲーム

5　本時の振り返りを行う。

伝え合いのこつについて全体交流

貴重な出合いでした

（文責　橘　慎二郎）

【齊藤先生コメント】

これから始まる外国語の学習に向けて、「外国語でコミュニケーションをとることは楽しい」と子どもたちが感じられる授業を目指した。留学生との交流では、子どもたちが一生懸命相手を理解しよう、自分のことを伝えようとしている姿が見られたと思う。しかしながら、私の思いだけで単元を組んでしまったところがある。これからは、カリキュラムや学年の系統性を意識して単元や授業を組み、小学校卒業時に目指す子どもの姿を思い描きながら、それに向かって各学年の内容を検討していきたい。

齊藤実践【第5学年　外国語科】
～ お互いのことを伝え合おう ～

本実践の主張点

子どもが外国語で伝え合うことのよさを実感できるようにするために

方策Ⅰ　コミュニケーションを重視した活動（すごろく）を取り入れる。
方策Ⅱ　外国の方と交流する場面を設定し，伝え合えたという充実感が味わえるようにする。

伝え合う必要感のある場面や状況づくりについて

本校の外国語科ではこれまで，「見方・考え方の系統性を意識した年間指導計画の作成」「伝え合いの場面での子どもの姿を客観的に見て取るための評価の在り方」「伝え合う必要感のある場面や状況づくり」という，大きく３点を重点項目として研究を進めてきた。このうち，齊藤実践では，子どもが外国語を使うことの良さを感じ，主体的に伝え合おうとする態度を育むための場面や状況を生み出す方法について提案されている。本校の外国語科では，ここでいう「場面」を，いわゆる伝え合いのシチュエーションとして，また，「状況」を，伝え合う相手の興味・関心や理解度というように区別して定義している。

○　伝え合いの相手意識，目的意識を明確にするための，単元のゴールの設定

本提案では，単元のゴールを「留学生と交流して楽しく会話し，相手のことを知り，自分のことを知ってもらうこと」と設定した。そして，楽しい会話が成り立つための様々な表現やこつを，交流会までに自分達で考えたり調べたりしていくという逆向きの単元構想を行いながら，その過程の中で見方・考え方を育もうとした。外国語を学ぶ子どもたちにとって，普段接し慣れない外国の方との出合いや交流は自分とは異なる文化や考え方に触れることのできる貴重な機会である。本単元においても，ゴールが明確であったことが子どもの志向性を継続させることにつながっていた。

○　相手の状況を見ながら伝え合うことができるためのゲーム的な活動の設定

ここでは，主の活動として「すごろくゲーム」を実施した。サイコロを振って実際にすごろくをするのは留学生であり，進んでいくマスには様々な指示や質問事項が明記されている。子どもたちはすごろくの周りに集まり，その都度留学生からの質問を受けたり，逆に自分の考えを伝えたりする，という内容であった。この活動には即時性や偶然性があまりないため，予め会話を準備しておく形になるというデメリットもあるが，初めて出合った留学生と一緒に，楽しみながら近い距離で会話をすることができるというメリットも想定されていた。本時には，終始明るい表情でゲームを楽しむ子どもや留学生の姿があり，授業者の意図には添うことができていたが，活動のねらいが不明確であったため，新たな見方・考え方が育まれたかどうかは不明である。外国語活動でなく教科としての外国語科である以上，活動の楽しさに重点を置くのではなく，子どもたちが学びの有用感を実感することに心を砕きながら単元を構想していく必要があると感じた。

本時レベルでの教師の役割について

○　協力支援体制の在り方

本時は，T1 と T2 の２名で授業が行われた。ここで課題となったのは T2 の役割である。本時では T2 の出番がほとんどなく，ほぼ T1 の発問や指示によって授業が展開されていた。話題となったのは，特に T1 が外国語を専門とし，聞いたり話したりすることが十分に可能な場合，T2 としてＡＴＥが入る必要があるかどうかという点である。ここで考えたいのは，本来の TT（協力支援体制）の在り方である。外国語科の T2 は，単に外国語を日本語に訳したり，発音練習の手助けをしたりすることが役割というわけではない。T1 による個別の見取りが必要な場面には，T1 と役割を交代して全体の指導を行ったり，客観的な視点から子どもたちに助言を行ったりするなど，その役割は多様に考えられる。これは，今回の留学生のような，外部からの支援についても同様である。子どもの相手意識，目的意識に強く関わる留学生の存在を，単なる動機付けのためのしかけと捉えるのではなく，T1 と連携しながら共に授業をつくる協力支援だと捉えてはどうだろうか。そのように考えると，授業の構想の段階から，「本当に T2 や留学生は必要だろうか」「見方・考え方を育む場面において，どのような連携が可能だろうか」等，緻密に連携の場面を考えた上で打ち合わせていく必要があると考える。

成果と課題

○　留学生の存在により相手意識が生まれ，子どもたちは状況を考えながら聞いたり話したりすることができていた。場面に必要な表現を繰り返し獲得してきたことで，臆せず外国語で伝え合う姿があちこちで見られた。

△　本単元のカリキュラム上の位置付けが不明瞭で，他の学年との系統性が見えにくかった。今後は見方・考え方の系統を核としながらも，知識・理解・技能に当たる部分の系統性も意識しながら年間計画を修正することで，より使いやすく，外部にも説得力のあるカリキュラムになっていくのではないか。